

## 『 私のふるさと 京都 』

言い伝えによればわが家系は平安時代の初めから先祖代々京都に住み都の盛衰とともに歩んできたという。後裔たる私が就職のためその京都を離れることになった時、母は親戚の人々から非難されたとのことだ。”長男が京都を離れるとはなんということか”と。昭和41年の春である。爾来茫々半世紀が過ぎた。

京都には私の青春時代のすべてが埋もれている。私の帰りを待っていると思う。時折京都を訪れることがあるが今は昔、変わり果てた街のたたずまいに自分の青春時代が消し去られたかのような寂寞感に胸が痛む。已むをえないだろう、もう私は外来者なのだから。とはいえ、中学高校時代に歩いた懐かしい風景は常に心に蘇る。

冬の寒さは「京の底冷え」といってここに住んだものでなければ分からない特別のものだ。しかし、それが好いこともある。観光客が少ないことだ。普段は人の多さのためにせつかくの風情が台無しになってしまう神社仏閣や庭が本来のたたずまいを取り戻し迎えてくれる。そこを静かに散策する贅沢は京都人に許された最高の楽しみといっていだろう。特にお勧めするのが「雪の金閣寺」である。

正直言って高校時代の私はこの寺が好きではなかった。小説や映画に取り上げられ華やかでいつ行ってもぞろぞろ歩き喧しい観光客にうんざりさせられた。一人でゆっくり味わうことができない。舍利殿（金閣）も軽佻浮薄なものに感じられて「なんだあんなもの！」と反発しか持てなかった。

高校3年の正月 前夜からの雪が薄っすら積もる朝 ふと思い立って自転車で金閣寺へ行ってみた。私の家から小一時間はかかったろうか。人っ子ひとりいない雪の中に金閣が陽光に輝いて鏡湖池の向こうに佇んでいた。周りの小道はうすく雪に覆われてまだ誰一人入った人がいない。普段門のところにいる寺の人さえ来ていない。



しめた！と心驚かせながら、でも、黙って入ってもいいのかなと訝りながら枝折門を押し開け入り込んだ。

私だけだ。足跡をつけながら進むと金閣は端正な姿で佇んでいる。荘厳といってよい。胸に熱いものがこみあげてくる。いろいろあったわだかまりはすっと消えていった。その朝の淡雪のように。

それ以降 金閣寺に行ったことはない。一たびあの最高の美を見たからにはそれ以外ものは見たくない。いや見てはいけないのだ。

50年を経た今でもあの時の荘厳な金閣は私の胸の中で光り輝いている。高校三年の青春が醸し出す淡い想い - 愛憎悲哀希望絶望期待不安……金閣はそんな複雑な若者の気持も黙って受け止めてくれていたのだ。

“ふるさととは遠きにありて想うもの。そして静かに詠うもの”か。